

---

# 白の青年

保泉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白の青年

### 【Nコード】

N9715U

### 【作者名】

保泉

### 【あらすじ】

彼女だった『彼』は今日もこの世界で生きている。

Arcadiaで同名で掲載しています。更新は遅いと思われま  
す。

## 序章

一步、足を前に出したただけだった。たったそれだけの動作で、彼女を取り巻く世界は急激に姿を変えてしまった。

世界でも有数な四季があり、様々な風景が楽しめる国は、岩と砂に囲まれた常夏の国へ。

シャープペンシルを持っていた割と白く華奢な手には、太陽の光を反射する無骨な刃を持つ。

そして柔らかな女性として生まれたはずの体は、頑丈な男性の体となっていた。

髪と眼の色も変わり、名前さえも失ってしまった彼女は、それでも彼として生きていた。

「世界が違おうが性別が違おうが、私は私に変わりがないだろう？」

『彼』となった彼女は、自身に起きた出来事を些細なことだと笑う。

このとき『彼』は強がっていたのは確かだ。

彼女はそれなりに幸せな人生を送ってきたと自負をしており、家族や友人に会えないという事実は確実に彼女の心を抉ったはずだ。

だが、それでも彼女は快活に笑い飛ばしてみせた。どこまでも広がる青い空を背景にして、澄んだ水のような薄い青の瞳を、楽しそうに細めながら。

彼女だった『彼』は今日もこの世界で生きている。

幕間・語り手 ヴァンの場合(前書き)

短いです。

## 幕間：語り手 ヴァンの場合

俺がセロに会ったのは、レックス 兄さんが亡くなってすぐだったと思う。

ミゲロさんの目を盗んでギーザ草原に行ったときなんだけどさ、アイツ魔物がうるついでるつのに、寝転がって爆睡してたんだぜ？あ、信じてないだろ？ホントなんだからな！

まあ、セロに近づいてから寝てるって分かったんだけどさ。

最初は人が倒れてるって頭が真っ白になってた。アイツ、髪の色白いし、遠くから見ると銀髪に見えてさ。兄さんが死んだばかりだったから、きつと姿を重ねてたんだろうな。

助けようって短剣持って駆け出したんだけど、近くに行く前に魔物に気づかれちゃって。囲まれてヤバいって思ったら、セロが突然起き上がったんだよ。

「犬畜生の分際で私の眠りを妨げるか。よしい度胸だ、今夜の鍋の具材になりたいものから来い。安心しろ、私は腹が減っているから量が多くても構わん。」

こんな感じなこと言うんだぜ？それでさ、一匹仕留めた後にセロがニヤリって笑ったら、魔物たち怯えてスゲー速さで逃げてった。

だよな、やっぱ怖いよな！

その後はパンネロも知ってるだろ。セロは行くあてがないとかで、俺たちの家族になってくれて終了。

他にはないので・・・パンネロはどうなんだよ？

俺は話したんだから、次はお前だからな！

## 第一話 物語は動き出す

乾季のギーザ草原を一人の青年が歩いてきた。鼻歌を歌いながら機嫌よく歩く青年が通り過ぎると、乾季に強い草の藪や地面にいた横穴からそろりとハイエナ達が頭を出す。

とある事情により、ギーザ草原に住む彼らは通り過ぎた青年を苦手としており、彼の姿を見つけるとすぐに隠れてしまうのだった。

「お、ようやく見えてきた。いやいや、まさか一週間かかるとはね」  
そんなことは気にもせず、青年は遠くに霞む建物を見て明るい声を上げた。だが、声とは違って表情はなぜか引きつっている。

青年は家族を大事にすることを信条としているのだが、大事な彼らはやたらと青年のことを心配する。初対面のときの、青年のあまりの世間知らずな印象を引きずっているのだろう。今回の、モブ退治の為に数日の間国を出ることさえ、猛反対されていた。

三日で帰ると出立時に伝えたが、討伐に掛かった期間が一週間。以前、一日でさえ姿が見えないと心配されたというのに、今回は七倍の期間だ。

「あー、土産に何か買ってきたほうがよかっただろうか？ いや、何でさっさと帰ってこないと逆に怒られるだけか」

大事な弟や妹が真っ赤になって怒る姿は、とても可愛らしくて青年は割りと好んでいる。だが、同じ怒りでも泣き顔は苦手としていた。

この後降りかかる小言の嵐を考え、青年は深い息を吐く。

「仕方がない、甘んじて受けとしましょう」

小言は嫌だが、久しぶりに弟たちに会える嬉しさに青年の気持ちは容易に傾いた。少しだけ重くなっていた足取りは、今はスキップをしそうなほど軽やかだ。もちろん、青年はある程度の常識と羞恥を持ち合わせていると自負しているため、行動には起こさなかつたが。

乾いた砂混じりの風に純白の髪を靡かせる青年の名前は、セロ。

彼がこの世界『イヴァリース』に来てから一年が経過していた。

> i 3 1 6 8 8 — 4 0 1 8 <

## 第一話 物語は動き出す

一週間ぶりのラバナスタの街並みを見て、セロは少し雰囲気が変わったな、と直ぐに気がついた。

最初に、帝国兵の雰囲気が違う。以前は横暴が目立つというよりも、どこのチンピラだと呆れんばかりの粗暴の悪い者が多かった。だがマーケットを見る限り、帝国兵が巡察していても、怯えた表情を浮かべる商人が少なくなっている。

次に、ダルマスカ人の笑顔が増えた。壁に寄りかかって俯く人は

少なく、顔を上げて前を見る表情に前ほどの影はない。

切欠はおそらく、不在の間にあつたはずの執政官の赴任だろう、とセロはあたりをつける。余程の好人物か、はたまた腹の黒い人物かは分からないが、唯一言えることはダルマスカの大半の民は、執政官を受け入れたということだった。

セロは、自分を兄と慕ってくれる少年を想う。

裏切り者の將軍に、そして仲間を信じなかった国に兄を殺されたのだと、悔しさに顔を顰めながら話してくれたのは、ほんの半年ほど前だった。彼が帝国から来た、しかも皇帝の三男坊の執政官の着任を冷静に受け入れられるとは、セロには到底思えない。

「帝国兵相手に何かやらかしてないといいんだが。とりあえずミゲロさんに不在中の様子を聞いてみるとするか」

きっと今の時間なら、弟達は彼の店を手伝っていることだろう。

目的地为ミゲロの店と定め、セロは商業地へと歩き出した。

ダルマスカ王国がアルケイディア帝国に敗北して、すでに二年の年月が経っている。

王都ラバナスタに住んでいた大半の民は、地下にある町ダウンタウンへと住処を強制的に移らされた。一部の富豪と帝国への寄付を行える商人だけが、地上の街に住むことができる。

セロが初めてこれを弟から聞いたときは、どこの世界にも賄賂をせがむ腐った役人はいるものだ、と呆れた。しかし、今回赴任した執政官の方針では、恐らく賄賂は受け取らない。どこからか情報が漏れた時点で、ラバナスタの民の好印象が間逆に転化してしまう。皇帝の三男坊がそんな馬鹿なことをする人物とは聞かない。



噂の反乱軍にとって、厄介な人物が執政官についたみたいだな、とセロは嗤った。

例の反乱軍とは、元ダルマスカ王国軍の兵士で構成された組織である。セロは、彼らがあまり好きではなかった。彼らが悪戯に帝国に牙をむく度、一般の民が帝国兵からの八つ当たりの対象になる。それに気づいていないのか、気づかない振りをしているのかはセロには分からなかったが、彼らが守ると言っているものはラバナスタの民ではなく、彼ら自身の誇りなのだ と理解した。

彼らの組織行動の情報を集めてみても、実にお粗末なもの。まるで義賊が貴族の屋敷を当て付けに襲うように、矢鱈滅多ら行動が派手だった。本来なら確実に目標を達成する為に、隠密性を高めるはずなのだが、本当に軍人なのかとセロが頭を抱えてしまったくらいだ。

本当に帝国を倒すつもりがあるのか、と胸倉をつかんで聞いた方がいい、とダラン爺　ダウンタウンに住むやけに事情通な爺さんに愚痴ったのは五ヶ月ほど前だっただろうか。

その後しばらく反乱軍が静かにしているのを聞いて、あの爺さん侮れん、とセロは戦慄した。

「あつ、セロ兄！」

「カイツか。店番中か？」

「うんそう……ってそうじゃないって！　全然帰ってこないから、すっげえ俺たち心配したんだよ！」

ミゲロの店に入ると、セロの姿に気づいた少年、カイツが駆け寄ってきた。現在ミゲロは不在で、なにやら慌てて出て行ったらしい。

喚くカイツを宥めながら、セロは妙だとミゲロの行き先を思案する。

仕入れの荷が遅れている位では、ミゲロは慌てて店を出るようなことはしない人物だ。店を離れるのは休憩と仕入れの交渉くらいで、それ以外は孤児達……弟達に依頼をする。

そう、いつもなら弟がそれを受けているはずだった。彼はミゲロに恩を感じているし、頼みごとを引き受けないという選択肢すらないだろう。それに今の時間帯はカイツではなく、いつもは妹が店番をしているはずであった。

ならば、彼の弟達は……ヴァンとパンネロはどこにいるのだろうか。

「カイツ、ヴァンとパンネロに今日は会ったか？」

「え？ パンネロ姉ちゃんは今日は会ってないよ。ヴァン兄ならナルビナから帰ってきたみたい」

セロはそうか、と頷く。そして間髪入れず、カイツの小さな頭を驚掴みにし、店の奥の物陰に引きずり込んだ。

「ええと、セロ兄？なんで俺の頭掴むの？」

「今聞き捨てならない言葉を聞いた気がしてな。なに、私の勘違いならいいんだが」

戸惑った声をあげるが、一見穏やかな笑みを浮かべるセロを見て、カイツは顔を強張らせる。いかにもしまった、と言わんばかりの少年の表情にセロは手に力を入れた。

「ではカイツ、別の質問をしよう。ヴァンはどこから帰ってきたん

だ？」

「いてえええつ！ ナ、ナルビナだよお！ ヴァン兄、王宮に忍び込んだみたいなんだ！」

痛みに目が潤むカイツを放し、セロは嫌な予想が当たったと右手で顔を覆った。

ナルビナとは正確には『ナルビナ城塞』といい、犯罪を犯した者や帝国にとって都合が悪い人物を収容する牢獄のことである。王宮に忍び込んだのなら、『ナルビナ送り』になるのは当然のことだった。

薄々、いつか彼がやりそうだと思っただけはいた、だがまさかセロが不在のときに実行するとは。いや、むしろセロがいなかったからこそ歯止めが利かず、ヴァンは実行したのだろう。

「とりあえずミゲロさんに話を聞くか……カイツ、どこに行ったか予想つくか？」

「いてて。外に出て右のほうに走っていったくらいしかわかんないよ。ヴァン兄も探してるみたいだけど」

「ほう、それは一石二鳥だな。なら路地にいる奴に聞き込むしかないか。では店番をがんばれよ、カイツ」

カイツの頭を軽く叩き、セロはミゲロの店を出る。ヴァンにどのような説教をしてやろうかと薄く笑むセロを見て、通りすがりのバングがびくりと肩を震わせた。

聞き込みを開始して数分後、目撃証言によるとミゲロは砂海亭に入っていたようだった。必死に路地を疾走するミゲロの姿は、と

ても珍しかったと孤児の少年が楽しそうに笑うので、セロも思わず笑った。不謹慎だが、それは是非とも見てみたい光景だ。

砂海亭に入り、セロはまず顔見知りを探す。店内を見回すと、こちらに気づいたのか一人の青年が駆け寄ってきた。

「セロじゃないか！ 随分、討伐に時間が掛かったな。ヴァンやパンネロが心配していたぞ」

「トマジか。すまないな、ややこしい場所に討伐対象がいてな」

「まあ、無事に帰ってきてくれてよかったよ。ヴァン達にはまだ顔出してないんだろ？ 今二階にいるぜ」

トマジは顎で二階席を示す。セロがそちらに視線を動かすと、丁度誰かが階段を降りてきているところだった。見慣れない整った容貌のヒュムの男が二人とヴィエラの女性が一人、そして可愛い弟のヴァンだった。

セロが彼らに近づくと、ヴァン以外の者達の視線がセロに突き刺さる。どうやら彼らに警戒をされているようだが、それはセロには関係がないことだった。

「え、セロ……？」

「ただいま、ヴァン。なんだ、私以外の誰に見えるのか聞いてもいいか？」

パクパクと口を動かすが、言葉が出てこない様子のヴァンに、セロはニヤリと口元を吊り上げる。ヴァンはそれをどこか泣きそうな目で見た後、セロに駆け寄り胸元を掴んだ。

「お、遅いんだよ帰ってくるの！ 俺やパンネロがどれだけ心配したと思ってたんだ、この馬鹿兄！」

「ちょっと討伐対象を探すのに時間が掛かってな。遅くなったのは

悪かった」

「……まあ、帰ってきたから別にいいよ」

強く服を掴むヴァンの頭をセロは撫でる。しばらくそのままの状態が続いたが、セロが撫でる手を止めたとき、低い声で呟かれた言葉にヴァンは固まった。

「ところでヴァン。カイツから聞いたんだが、ナルビナ送りになったそうじゃないか」

ビクリと肩を震わせるヴァンの米神に拳を添え、両サイドから力を混めて抉りこんだ。

「執政官就任日に王宮に潜り込むとは、お前は馬鹿か、いや馬鹿だな？警備が厳しいに決まっているだろうに、感情に任せて実行するには問題がありすぎるとなぜ分からない。」

それにやるなら就任日から一週間後だろう、そのところが一番環境にも警備にもなれて気が緩む時期だ。今回はもう無理だが、次回はしくじるなよ」

「いだだだだ！ わかった、わかりました！だから離せて！」

「断る。仕置きはキッチリ行うものだろう？」

痛みに手を振り払おうと暴れるヴァンだが、モブ退治で鍛えているセロの手を振り払うことはできなかった。それを止めることができるのは第三者の声でしかない。

「おい、アンタ。ヴァンとじゃれるのはいいが、今は急ぎの用事があってね。後回しにしてくれ」

少しイラつきを感じ取れる声に、セロはヴァンを離す。声の主は

端正な顔立ちの細身の男のようで、形のよい眉を潜めてセロを見つめていた。

「セロ、パンネロが誘拐されたんだ！ それでバルフレアが飛空艇を出してくれるから、ビュエルバまで行ってくる！」

「なんだと？」

「本当なんだよ、セロ。ああ、お前もよく帰ってきてくれた」

「ミゲロさん……犯人の要求はもう来ているのですか？」

二階にいたのか、階段を降りてきたミゲロは、強張った表情を緩めてセロの背中を軽く叩く。緩んだといってもまだその表情は硬く、可愛い妹、パンネロの誘拐が事実なのだとセロは理解した。

「ああ、手紙があるんだよ。その空賊宛で、ビュエルバの魔石鉱に來いと」

「ミゲロさん宛ではなく？」

「ヴァンが帝国兵に捕まったとき、空賊たちも一緒だね。そのときに、その、誤解を受けたようなんだよ」

言いにくそうに呟くミゲロに、セロは米神を揉み解した。つまり、パンネロは男前の空賊の、恋人と間違えられたのだろう。どういうシチュエーションかはセロには分からなかったが、周りからはそれなりに見えるような状況だったに違いない。セロは空賊と思わしき青年に向き直り、頭を下げた。

「その空賊の方々。私はヴァンやパンネロの保護者を自認している、セロという。恐らく、いや確実にヴァンが迷惑をかけて大変申し訳ない」

「……まあ、退屈しなかったのは確かだな」

「ふ、それだけではないだろうに。……貴方は、ヴァンをビュエル

バまで送ってくれるとのこと。私も共に連れて行ってくれないだろうか」

横で脹れているヴァンに気を使っているのか、空賊の青年は言葉を濁す。その様子にはセロは苦笑を浮かべた。

「え、セロも行くのか？」

「……ヴァン、お前のここ最近の行動を、胸に手を置いてよく思い出せ」

「う」

王宮に忍び込むは、投獄されるは、脱獄するはと、ここ最近のヴァンは行動的過ぎて予測ができない状態だった。セロには彼らに弟の保護者を任せるのは、あまりにも忍びない。

ヴァンも自覚をしているのか、気まずそうに視線をそらし、懸命にも言葉をつぐんでいる。

「それで、どうだろうか」

「ハア……一人ぐらい増えたって変わらないさ。好きにすればいい」  
「感謝する」

投げやりに言う青年に、セロは口元を緩める。

綺麗な顔立ちであり分らないが、恐らくこの青年は見た目よりも若いのもしれない。セロには青年がヴァンに似ているように思えて、後姿を微笑ましく見つめていると、横に誰かが立ったことに気づいた。

「青年はわりと照れ屋なんだな」

「ええ。彼、見た目よりも可愛いんだよ」

素晴らしいプロポーションを持つヴィエラの女性は、成人を過ぎているだろう青年を可愛いと評価する。内心同意を返しながら、セロは空賊の青年にエールを送る。

「私はフラン、照れ屋の彼はバルフレア。その男性は後で紹介するわ」

脹れるヴァンを宥めている金髪の男性に視線を向け、フランは砂海亭の出口へと歩き出した。

それを目で追いながら、セロは胸に掛かったペンダントを左手で握り締めていた。



## 第一話 物語は動き出す（後書き）

挿絵追加しました。背景がすごい適当ですが、  
たまにこの低クオリティの挿絵がいつの間にか入ってます。

## 第二話 空中都市ビュエルバ

「シュトラールだ。なかなかのもんだろう。」

「すごいな……本当に空賊なんだ！」

「俺の首で船が買えるぜ」

王都ラバナスタの西門にあるターミナルでは、毎日多くの人々が飛空艇を利用していている。その中でも自前の飛空艇を持っている者は、飛空艇格納庫を借りることができる。もちろん、有料でそこその金額はするのだが。

飛空艇、シュトラールを見てはしゃぐヴァンに気をよくしているのか、バルフレアの声は明るいものだ。機嫌よく機工士のモーグリ達に語りかける姿は、ヴァンと並んで兄弟のようだった。

「随分と懐いているもんだ。」

「妬いてるの？」

「いや、微笑ましすぎて顔が崩れる。」

セロは緩んでいる自覚のある頬肉を摘む。ちらりとフランに視線を移すと、彼女も口元に弧を描いていた。どうやら、二人共考えることは同じのようだ。

「君はヴァンの兄なのか？」

同じく二人を見つめていたもう一人の男性が、セロの後ろから声をかけた。

「血はつながってはないが、兄と慕ってもらっている。」

「そうか。」

「最近は何親にでもなった気分だけだな。」

「お母さんは大変ね。」

「おっ……まだ十九なんだが……息子が増えたりはしないだろうな？」

「さあ、どうかしら。」

男性との会話の最中にフランの茶々が入り、セロの気は緩みっぱなしだった。楽しそうなヴァンとバルフレアを放置して、セロ達はさっさと飛空艇に乗り込む。

フランに操縦室に案内され、セロが座席についていると隣に金髪の男性が座った。

「もうここなら彼の名前を聞いてもいいか？」

「大丈夫よ。」

セロはフランに許可を伺い、座席に寄りかかりながら男性の席へ顔を向ける。

「それでは改めまして。ヴァンの保護者を自認する、セロだ。貴方は？」

「私は、バッシュ。バッシュ・フォン・ローゼンバーグという。」

どこかで聞いたことのある名前に、セロは首を傾げた。しばらく思索し、それがダルマスカ王を殺したと云われる将軍の名前と気づく。

「ああ、なるほど。それじゃあ市街地では不味いな。」

「……それだけ、か？」

記憶の底から引き出すことができず、すっかりした様子のセロに、バツシユは戸惑った表情を浮かべる。ラバナスタの市民ではなさそうなバルフレアやフランはまだしも、ヴァンのバツシユへの憤怒は凄まじいものだった。正直、バツシユにとって彼が信じてくれたということさえ驚いていた。

ヴァンと親しいセロが、レックスのことを知らないはずはない、とバツシユは罵られる覚悟を決めていたのだが。

「すごく、不思議そうな顔だぞ。何を考えてるのか顔に割りと出るな、バツシユは。」

自分より十は上のバツシユの様子が楽しいのか、セロは年相応の笑顔を浮かべている。

「簡単に説明するとな、私はラバナスタ生まれではないから、元々アンタに対する恨みってものを持っていない。この国に来たのも一年前からだし、せいぜいヴァンの話を聞いたくらいだ。」

「ならば、レックスの彼の兄の話も聞いただろう。」

「そりゃあな、聞いている。だが、あの子がアンタに懐いてるのも事実だろう。恨みを持ったまま誰かに懐けるほど、あの子は器用じゃないさ。」

違うか、というセロの言葉に、バツシユは首を横に振った。ヴァンの素直な性格は、道中共に過ごしているだけで直ぐに分かっていた。

「まあ、謀られたんだらうな、程度の理解でいいだろ。」  
「十分だ。」

不思議なものだ、とバツシユは彼らを見て思う。長年共に研鑽し合った戦友は彼を疑い、まだ一週間も共にいない彼らが、容易くバツシユを信じる。これも運命の皮肉か、とバツシユはそっと目を閉じた。

「素直なのはヴァンの美点なんだが、その分猪突猛進なんだよなあ。」

「でもそこが可愛いんでしょう？」

「まあね。今回は兄や姉や父が増えたから、多少は暴走しても大丈夫だろう。」

「父というのは、もしかして私か？」

「フランはどう見ても姉だろう？」

くつくつと喉で笑うセロをバツシユがなんとも言えない表情で見つめる。それは途方にくれている、といったほうが正しいほど情けない顔で、操縦席に座りながら後ろの二人の様子を伺っていたフランは、笑いを耐えるのに苦労をしていた。

「フラン、航路を……ってどうした。」

「ふふ、何でもないわ、お兄さん」

「は？」

ようやく操縦室に来たバルフレアの怪訝な顔とヴァンの不思議そうな顔に、セロとバツシユは顔を見合わせて微笑んだ。

## 第二話 空中都市ビュエルバ

空中都市ビュエルバはその名のとおりに宙に浮かんだ都市国家である。大小様々な島々を、繋ぐのは飛空艇のみで、観光と魔石鉱から産出する質の高い魔石を収入源としている。

「だめです、いません！」

「よく探せ！」

「はいっ！」

観光客で賑わうターミナルに、何故か帝国兵が慌ただしく行き交っていた。

「誰を探しているのかは分からないが、用心はいつでも必要なものだな。」

「まったくだ。あんたは死人だ、名前も出さないほうがいい。」  
「無論だ。」

走り去っていく帝国兵を横目で見ながら、薄い雑誌を開くセロの言葉に、バルフレアと前髪を降ろしたバツシユは同意を返す。

バツシユの髪型を変えることは、シュトラールでビュエルバまで移動する際に、セロが提案したことだった。

彼は将軍という地位に着いていたこともあり、あまりに顔が知られすぎている。かといって顔を隠すのでは、怪しめと言っているよくなものだ。変装は追々考えていくとして、当座のつなぎにと髪を

降ろすことに決定したのだった。

「で、何を読んでんだあんな。」

「ん？パンフレット。どうせなら観光客に紛れたほうがいいだろう。」

「……その赤いペンでチェックした店は？」

「行くに決まっている。パンネロが行きたがっていたからな。」

パンフレットに赤い印を付けていくセロを、バルフレアは呆れた表情で見つめる。楽しそうな彼の姿は、どこからどう見ても観光客にしか見えない。

これが演技であれば見事だが、こいつは本気で楽しんでいるとバルフレアは確信していた。

「はあ……まあ、目的を忘れんなよ。ルース魔石鉱はこの先だ。最近あそこの魔石は品薄らしいが。」

「それで魔石の価格が上がっているのか。質はいいからな、ここのは。」

先ほどまでの機嫌のよさはどこに行ったのか、嫌そうにセロは顔を顰めている。どこか幼い表情に、そういえば彼はまだ十九歳だったな、とバツシュは思い出す。

「魔石関連で何かあったのか？」

「いや、仕事で必要なんだ。だが最近、質の低いものしか手に入らない……高くてな。」

「セロー！」

不貞腐れているセロに、機嫌よく声を掛けるヴァン。弟に気づいたセロは、とりあえず表情を戻してヴァンに向き直る。

「どうした。」

「魔石鉱、こいつも連れて行っていいだろ？」

後ろを振り向くヴァンの近くに、十代前半ほどの少年が立っていた。身なりもよく、まだ幼い顔に浮かべる表情は、年齢にそぐわないほど穏やかなものだった。

「すみません。あなた方が魔石鉱に行かれると聞こえまして。僕も同行させてくれませんか？奥に用事があるんです。」

「……どういう用事だ。」

どう見ても育ちのよい少年に、バルフレアは目を細める。魔石鉱には大きい蝙蝠程度からアンデットまでの魔物が住み着いており、それなりの腕を持っていないと進むことさえあまりに厳しい。

当然観光にも向かず、工夫達も魔物避けの装置を使用して採掘しているほどだ。

「では、あなた方の用事は？」

そんな魔石鉱に用事があるという少年はあからさまに怪しい。半ば睨んでいるバルフレアの視線に、少年は穏やかな笑みを浮かべるだけだ。

「いいだろう、ついてきな。」

「助かります。」

「俺たちの目の届くところにいるよ。その方が面倒が省ける。」

「……お互いに。」

バルフレアは、下手に少年を探ればこちらがボ口を出すと判断し



た。まだパンネ口を迎えにいく前の今、余計な騒動は起こしたくない。ため息をつく音に、セロはヴァンと親しげに話している少年からバルフレアに視線を移す。

「いいのか？連れて行つて。」

「こちらの理由を言えない以上、断つて別の面倒がくるよりはマシだろ。」

「断つてもこつそり後を付いてくるだろうな、少年は。まあ、面倒はヴァンがみるだろう。」

二年前から孤児達のリーダー格だったヴァンは、子供っぽい言動からは意外なほど面倒見がよい。それはセロがヴァンに拾われた経緯からもよく分かるが、困っている者を放って置くことができないのだ。

今もバルフレアに邪険にされた少年　ラモンと名乗った彼に、大丈夫だとフォローをしている。

「たぶん中でいろいろあるけど、心配ないよ。なあ、バツシュ。」

これさえなければな、セロは頭を抱えたい気分だった。

先ほどの忠告をすっかり忘れた様子で、明るくバツシュに声を掛けたヴァンに、バルフレアとバツシュの表情は強張ったのは当然のことだった。

「あ、ヴァンさん。向こうで何かあるみたいですよ。」

「え？本当だ、何やってんだろ。」

「はいはい、その二人。フラフラと違う道に逸れていくんじゃない。」

興味深いとはかりに広場に向かおうとするラモンに、便乗してついて行こうとするヴァン。セロはそんな二人の襟首を掴み、寄り道をするのを防いでいた。

子守<sup>ラモン</sup>をヴァンに任せると言っていたセロが二人の傍にいるのは、ヴァンのあまりの迂闊さに大人組みが危機感を抱いた為だ。ヴァンの扱いに慣れており、わりと常識もある彼が役目を振られるのは当然だった。

道も分らないのに突き進むヴァンと、彼に引つ張られながら楽しそうに付いていくラモン。そして何度も道を逸れる二人にイラつきはじめているのか、薄っすらと笑みを浮かべながら二人の頬を結構な力をこめて抓るセロ。

「ごめんなさいと謝る子供二人と、街中だというのに叱る保護者が一人。その様子を少し離れた場所から、バルフレア達は呆れた様子で見ている。」

「彼と一緒に来てくれてよかったわね。」

フランの言葉に沈黙を返すバツシュとバルフレア。もし砂海亭でセロが合流しなければ、彼の立ち位置には彼らのどちらかが居たであろうことは明白だった。

「以上、説教終わり。ほら、迷惑になっているから早く行くぞ。」

「……自分が説教しだしたくせに。」

「ヴァン。」

「はい、すみません！」

「ラモンもだ。ぼんやりしていると人にぶつかるだろう？」

「え？」

頬を押さえて呆然としているラモンに、セロは左手を差し出す。

示された意味が分からずにいるラモンの右手を、戸惑うこともなく繋いだ。

「ほら、行くぞ。」

「は、はい。」

「……見事に躡けられているな。」

「ああ、さすが自称保護者だ。」

ヴァンの襟首を掴みながらラモンの手を引くセロに、バツシュとバルフレアは呆れと感嘆の混じった声をあげる。自分達よりは付き合いの長いヴァンはともかく、先ほど出会ったばかりのラモンですらされるがままに手を引かれている。

「君は、あの少年の正体に検討は付いているか？」

「さあな。確実なのは帝国民ってところくらいか。」

ダルマスカ王国との戦争が終了して二年、アルケイディア帝国とロザリア帝国間の緊張は、これ以上ないほどに高まっていた。

いつ開戦しても可笑しくはない状態であり、侵攻の大義名分を両国とも探しているとの噂もあるほどである。

そんな情勢では、ロザリア帝国民がアルケイディア帝国の南に位置するビュエルバへ観光で訪れることは難しい。

「あの坊ちゃんが唯の帝国貴族ならいいんだがな。」

「それは」

「お話はそこまでにしたら？お母さんが怒ってるわよ。」

突然のフランの声に二人が顔を上げると、少し離れた先でセロが笑みを浮かべてこちらを見ていた。

『さつさと来い』と表情に出さなくとも理解できることは、セロの隣で引きつった表情のヴァンとラモンを見る限り、気のせいなどではないのであろう。

このままでいると、先ほどのヴァン達のように、バルフレア達も説教を受けることは確実だ。

「『お母さん』ねえ……似合いすぎだろ。」

「そうね、『お兄さん』。『お父さん』も早く行ったほうがいいわ。」

「ちょ、まで……何だそれは。」

「どうしたの？『お兄さん』。」

眉を潜めるバルフレアに、フランは楽しそうに言ってセロ達の方へ歩いていく。

「彼女は余程この呼称が気に入ったようだな。」

「……アンタはもしかして『お父さん』か。」

「ああ。そして彼女は『お姉さん』だそうだ。」

頭が痛いとはかりに額に手を当てるバルフレアの肩を軽く叩いて、フランに続くバツシュ。その行動の示す意味が『あきらめる』と言っている事を理解でき、バルフレアはため息を抑えることができなかった。



### 第三話 ルース魔石鉱？

一行が目的地に着いたとき、工夫たちは作業を中断していた。彼らに理由を尋ねると、どうやら帝国兵が視察を行っているため、中止せざるを得なかったようだ。

ここで引き返すのひとつの手だが、少年・ラモンの同行を許可している以上、帝国兵が視察をしているからといって中止にはできない。

「とりあえず入ってみるか。」

バルフレアの提案に全員が了承をし、坑道の入り口まで近づいてみるようになった。

「で、ここってなんてところだっけ？」

「ルース魔石鉱だ。イヴァリース有数の鉱脈さ。」

「なんか、立派じゃないか？」

「観光名所でもあるからな。中に入れば魔物がウジャウジャいるが、入らない分には問題ない。」

坑道にしては立派過ぎる柱が並ぶ入り口にヴァンが首を傾げる。

それに苦笑を浮かべながらバルフレアが再度説明をする。

「こここの警備は帝国軍が？」

「いえ、ビュエルバ政府は特例を除いて、帝国軍の立ち入りを認めていません。」

「つまり、今の視察は特例に当たるといわけだな？何を見ているのか……」

「僕にも、ちよつと。」

バツシュとセロの言葉にラモンはすらすらと淀みなく答える。聞きかじった知識ではなく、頭の中にきちんと整理されている情報なのだろう。

その様子をバルフレアは視線の端で注意深く捕らえていた。

「では、行きましようか。」

ラモンと未だ手をつないだままのセロは、先立って魔石鉱内に入っていく。それに続くヴァン達だったが、歩き始めてすぐ立ち止まったセロを見て、同じく足を止めた。

「セロ？」

「静かに。……誰か来る。」

金属の擦れる音を拾ったのか、セロはラモンの手を引いて柱の陰に姿を隠した。

「奥から複数の足音が聞こえるわ。」

「たいした耳だ。」

魔石鉱の奥から見えない位置に隠れながら、バルフレアはフランの言葉に感心した。ヴィエラのフランはともかく、ヒュムのセロがこれほどまでに感覚が鋭いことに驚いていた。

全員が隠れてからしばらくすると、バルフレア達の耳にもガチャガチャと鎧の音が聞こえてきた。

魔石鉱の奥から現れたのは数名の人物だった。帝国兵達と禍々しい鎧を纏った人物、そして初老の男がセロ達が隠れている柱の前を

通り過ぎて階段を上っていく。

「念のため伺うが、純度の高い魔石は本国ではなく。」

「すべて秘密裏のヴェイン様のもとへ。」

「ふっ……貴殿とは馬が合うようですね。」

不気味な鎧の男は、初老の男の声に軽く肩を揺らして笑う。

「それはけっこうですが。」

鎧の男の言葉に眉を潜め、初老の男は淡々とした声で告げた。

「手綱をつけられるつもりはございませんな。」

「ふっ、ならば鞭をお望みか？」

足を止め、鎧の男は振り返る。兜に隠れてはいるが、剣呑な視線が初老の男に注がれた。

「つまらぬ意地は貴殿のみならず、ビュエルバをも滅ぼすことになる。」

### 第三話 ルース魔石鉱？

帝国兵達が魔石鉱から去っていくのをみて、セロ達は柱の影から



こっそりと顔を出した。

「今の、誰？」

「ビュエルバの侯爵、ハルム・オンドール4世です。」

階段を眺めながら　いや、睨みつけながら呟くヴァンに、ラモンが隣に移動しながら答える。

「ダルマスカが降伏した時、中立の立場から戦後の調停をまとめた方です。帝国寄りってみられてますね。」

「反乱軍に協力してるってウワサもあるがな。」

「……あくまで、ウワサです。」

皮肉気と言うバルフレアに、ラモンは振り返ってむっとした顔を向ける。信用している知人を侮辱されて不愉快になった　そんな少年の様子に、やはり最低でも帝国貴族かとバルフレアは確信した。

「よく勉強してらっしゃる　どこのお坊ちゃんかな。」

　　一步ラモンに向かって足を進めたバルフレアに、ラモンは思わず後ろに下がる。

「どうだっていいだろ。パンネロが待ってるんだぞ。」

　　追求のために再び口を開こうとしたバルフレアを止めたのは、不機嫌そうなヴァンの声だった。

「パンネロさんって？」

「友達　いや、家族。さらわれてここに捕まってる。」

話が逸れたことに安堵したのか、少し表情を緩めるラモンにヴァンは暗い表情で告げた。

「ご家族の方が……」

「うん。年下だけど、姉みたいな奴なんだ。」

「いつも叱られているからな、ヴァンは。」

ヴァンが顔を上げると、いつの間にかセロが隣に立っていたことに気づく。彼は宥めるように弟の頭を撫で、再びラモンと手を繋いだ。

「あの……」

「さあ、行くぞ。パンネロはしっかりした子だから泣き虫でもあるからな。」

手を引きながら歩き出すセロに、ラモンは戸惑った表情のまま連れて行かれる。それを面白くなさそうに見つめるのは、やはりバルフレアだった。

「過保護すぎじゃないか？」

「そうか？セロはラモンくらいの奴には、大抵あんな感じだぞ。」

「坊ちゃんだつて自分の身くらいは守れる力はあるだろうさ。根っからの保護者気質なのかねえ。」

「え？いや、あれはラモンをからかって遊んでるんだと思うけど。」

「遊んでる？」

「セロ、『青少年をからかうのが趣味だ』っていつも言ってる。」

小さな声で呟いた言葉に、反応を返したのはヴァンだったが、この反応にもバルフレアは眉をひそめた。

「意外、という訳ではないな。」

「ええ、彼にとっての青少年は年上も含まれるみたいだけど。」

視線を向けられながらのバッシュとフランの言。 擲掬されたバルフレアは、本日何度目かもわからないため息をついた。

「しまった。」

「どうかしましたか？」

広いとはいえ、薄暗い魔石鉱の中を歩いているのは、気が滅入る。何か気を紛らわすものはないかと辺りを見回しながらセロが歩いていると、遠くから軽く且つ固いものがぶつかる音が耳に入った。

突然立ち止ったセロと手をつないでいたラモンは不思議そうに彼を見上げ、先頭を歩いていたセロが立ち止ったことで、後続のヴァンたちも怪訝な顔で立ち止る。

「いや、ルース魔石鉱って私は初めて来たんだが、魔物の種類はやはりアンデット系か？」

「いまさら何を。暗くて湿度の高い坑道にアンデットはセオリーだろ。」

「だよなあ。」

呆れた表情のバルフレアに振り返りながら、空いている右手でガシガシと頭をかきセロは深いため息をついた。

「なんだよ、セロってアンデット苦手だったっけ？」

「いやー、苦手と言えば苦手なんだが。というか、あいつら得意な奴っているのか？」

「少なくとも、僕は聞いたことはないですね。」

嫌そうな顔をしているセロに、ヴァンは珍しいものを見たとはかりに目を輝かせ、ラモンは苦笑する。弟分のヴァンは、これほどまで負の表情を浮かべるセロは見たことがなかった。良くも悪くも、何事も笑い飛ばす癖のある兄貴分は、弟たちの前では悪くて苦笑程度しか浮かべない。

「何か都合が悪いことがあるなら先に言っておけ。そのほうが対処しやすい。」

「都合が悪いというか、まあ、見ていればわかるだろう。皆は後から……そうだな、五メートルほど離れて付いてきてくれ。」

少し眉をひそめたバルフレアにそう返すと、セロはラモンとつないでいた手を離し、一人先に進み始めた。

その後ろ姿を見つめながら、ヴァンたちも後に続く。

「どうしたんだろ、セロ」

「さあな。」

悩むそぶりを見せるヴァンに、バルフレアは肩をすくめる。

アンデットに何かあるのかは分からないが、自称保護者を名乗る以上、ヴァンやラモンに害が及ぶようなことならば、セロは自分たちと話しているだろう。

「ヴァン、セロの腕はどれくらいだ？身のこなしを見る限りは、か

なり場数は踏んでいるようだが。」

「うーん、強いんじゃないか？」

同じようなことを考えたのか、バツシュがヴァンの横に近づいて尋ねる。だが、ヴァンの反応は『よくわからない』と全面に表すものだった。

「曖昧だな。」

「だって戦ってるどころ、最近見てないし。俺がモブ退治についていこうとすると、いつも撒かれるんだぞ。」

セロだって、一人じゃ危ないのに。

口を尖らせるヴァンの頭を宥めるようにバツシュが軽く叩く。

「前は見てたつてののか？」

「うん。だってセロに剣の使い方教えたの、俺だから。」

「何？」

自分に視線が集まっていることに気付き、ヴァンは慌てて顔の前で手を横に振った。

「え、あ、教えたつていつても、すっぱ抜けない剣の握り方とか手入れの仕方くらいだけど。セロ、あと全部適当にしてるらしいし。」

「そこじゃない、あー、セロに教え始めたのはいつの話だ。」

「いつつて……半年前だけど。」

厳しい表情のバルフレアに、ヴァンが思わず一步後ろに下がったとき、前方から金属のぶつかり合う高い音が響いてきた。

ヴァンたちよりも前を歩いているのはセロだけだが、いつの間にか距離が離れていたらしい。少し向こうで三体のスケルトンに囲ま

れたセロが剣を切り上げるのが見えた。

バルフレアの舌打ちが聞こえたと同時に、バツシュが走り出す。少し遅れてヴァンが追いかけるのを見て、バルフレアは愛銃を構える。

「セロ！」

ヴァンの叫ぶ声に一体のスケルトンを仕留めたセロが振り向くと、そこには今にも槍を突き出そうとするスカルアーマーの姿があった。どうにか軌道を逸らそうと剣を振り上げようとした瞬間、何かが破裂する音とともに目の前の助スカルアーマーの頭蓋骨が吹き飛んだ。

「一旦退けセロ！」

「く、了解！」

攻撃の主、バルフレアは銃弾を込め直し、頭蓋骨がないままセロへの攻撃を諦めていないスカルアーマーを狙い撃つ。二度目の攻撃が大腿骨に当たったスカルアーマーが大勢を崩した隙に、セロはバツクステップでスケルトンたちの包囲網から抜け出した。

「アンデットが、しかもスケルトンが、こんなに早く動くなんて、聞いたことねえよ！」

「俺もだ。しかも」

「セロだけを狙っているようだな、ハアッ！」

スケルトンたちは近くにいたバツシュ達ではなく、離れたセロを執拗に狙い続ける。その動きは、脆い体を持つスケルトンとしては異常なほど素早いものだ。

無防備に背中を見せたスケルトンをバツシュが一太刀で仕留め、

ヴァンがセロに向かうもう一体を切りつけて妨害した。

攻撃されたにも関わらず、尚もセロに向かうスケルトンに、フラ  
ンが放った矢が降り注いだ。その攻撃でスケルトンの骨は砕け、骨  
と金属が地面に落ちる軽い音が坑道に響いた後は息を整えるセロの  
呼吸音のみ聞こえていた。

「ヴァン……バツシュ、フラン。悪い助かった。」

「おいおい、俺には礼はないのか。」

「バルフレアも。流石にあの量で来られると不味かった。」

「どういたしまして。」

ひとつ深呼吸をして調子を戻したセロは、軽く頭を下げて礼を言  
う。見たところ、少し頬を切っている以外怪我はないようだ。スピ  
ードが異常だったとはいえ、三体のスケルトンに囲まれた程度で多  
少息がはずむのを見ると、体力はあまりないのだろう。ほぼ我流と  
はいえ剣の扱いはそれなりにできることを思えば、鍛えるといいと  
ころまでいけるかもしれない。

「で、あれが理由か？」

「そうだ。一カ月くらい前に気がついたんだが、何故かアンデット  
系に全力で襲われるんだ、私は。」

「全力……」

「確かに全力だな。」

そんなことをバツシュが考えていると、武器のチェックが終わっ  
たセロにバルフレアが問いかけると彼は嫌そうな表情でうなづいた。  
よほど嫌な目にあつたのだと皆理解した表情を浮かべる。

「なんかアンデットに嫌われることしたんだろ、セロ。ハイエナの  
ときみたいに。」

「生憎と身に覚えがない。さあ、奥に進もう。私が先頭でかまわな  
いな?」

「ああ、あの速さじゃ振り切ることもできないだろ。」

ヴァンのからかいを流したセロの提案に、バルフレア達は頷いた。  
あの人間と変わらないスピードで向かってくるなら、逃げるときも  
こちらが全力疾走しなくてはならないだろう。ならば、ヴァンとは  
もかくラモンがいるこちらが不利だ。

「つまり?」

「全部ぶっ潰せ、ってことさ。」

困のような扱いにはなるが、セロが前方にいてくれたほうが、フ  
オローもしやすい。こうしてルース魔石鉱に居るアンデットたちは、  
例外なく叩きつぶされる運命となった。



#### 第四話 ルース魔石鉱？

セロを先頭にして坑道を進む一行。幾度となく襲いかかってくるスケルトンたちの討伐数は、もはや三桁に到達しようとしていた。皆、あまり怪我は見当たらないとはいえ、流石に疲労の色が浮かびあがり始めている。

「しかしまあ 分かっていたとはいえ、多いな。」

「セロはモブ退治をしていたんだろ？よく無事だったな。」

愛銃に弾を込めながら疲れを隠せない声で呟くバルフレア。剣の刃こぼれを確認しながらバツシュが尋ねると、セロは右肩を回しながら苦笑いを浮かべた。

「一人では行動していなかったからね。アンデット系が発生するよ  
うな地域の依頼は受けなかったし。」

「そりゃ懸命だ。」

「だが、それでは依頼をえり好みすることにならないか？」

「そうだな、クランから注意を受けたことはある。だが、私としてはモブ退治は副業だからな。あくまで資金が苦しいときのみだ。」

モブというのは、いわゆるモンスターの中の賞金首のことだ。突然変異で亜種化や巨大化、もしくは凶暴化したものが多く、通常よりも討伐レベルが高く設定されている。

討伐依頼を出すのは個々のモブによる被害を受けた民間人などが、その依頼を束ねるのがクランという組織だ。低レベルのモブであればクランを経由せずとも依頼を受けることができるが、ランク

が高いものはクランに加入しなくては受けられない。

そのほかにも緊急性の高い依頼を、信用のあるメンバーにクランから依頼をすることもある。セロはメンバーとして登録をしてはいるが、突発的な依頼は断っているためクランメンバーからはあまり良く思われていない。クランのトップには話を通し、納得させているのだが。

「セロさん、これをどうぞ。」

「これは……ハイポーション？」

「ええ。セロさんは常に困役をされているので、怪我がひどいようですし。」

駆け寄ってきたラモンが差し出した瓶を、つい受け取るセロ。

ラモンが渡してきたのはハイポーションといって、回復薬のポジションの上位にあたる。上位だけに値段も三倍になるが、その分回復する効果は高い。

「いや、いらないよ。こんな高価なもの。君が持っているといい。」

「ですが。」

「なに、心配はいらない。傷の回復はするさ　　おーい、ちょっと集まってくれ。」

見上げてくるラモンの手を取り、その掌の中にハイポーションの瓶を握らせると、少し音量を上げた声でセロは周りに呼び掛けた。周りで防具の状態や地図を見て現在地を確認していたヴァンたちは、響く声に顔を彼へと向ける。

「どうしたんだよ、セロ。」

「いや、まとめて回復させようと思ってね。」

ケアルラ　　」

一番最初に近づいてきたヴァンに笑いかけながら、ある程度の距離に仲間たちが集まったのを確認して、セロは発動状態にまで準備していた『魔法』の呪文を唱える。

純白の光がそれぞれの胸元へと飛び、体を包んだ後には傷はすでに消えていた。

「これは……」

「複数回復魔法 ケアルラ だと？」

手に残った光の残骸を見ながら、バツシュとバルフレアが呟く。同じように光が消えていく様子を見つめていたフランが、セロに視線を移動させる。

「セロ、これをどこで手に入れたの？」

「ん？ああ、モブ退治の仕事料の代わりに依頼人に習得させてもらったんだ。地元じゃ、今魔法が品薄だからな。」

魔法は武器や防具と同じように、専門の店で購入することができる。正確に言うと、魔法を覚えることができるアイテムを購入する。これは一度買えば何度か使用することができ、品質によって使用できる回数が異なるものだ。

その魔法を習得するための素養があると、魔法を覚えることができる。だが、そのレベルに達していないと覚えられずに、使用回数がひとつ少なくなってしまうのが注意点だ。

強力な魔法になれば料金も高額でしかも手に入りにくいいため、代金代わりにアイテムを使わせる依頼人もごく少数ではあるが、いる。

帝国の占領を受けているラバナスタは、物資の流通がいまいち良くない状況が続いている。武器や防具はもちろん、魔法さえ基本的

なものしか店先には並ばない。まあ、ラバナスタの周りの砂漠は、奥に入り込まなければそれほど強いモンスターがいるわけではないので、今のところ問題はないようだが。

「魔法使えたんだな、セロ。」

「ああ、白魔法だけ覚えてる。便利だろ？ラモン、だからハイポーションはいいよ。」

「はい……」

心なしか、落ち込んだ様子のラモンに、セロはニンマリと楽しそうに笑う。好意を無下にするつもりはなかったが、回復薬　しかもハイポーションは素直に未成年から受け取るには少々値段が高すぎる。ハイポーションひとつの値段で、初級回復魔法　ケアル　が買えてしまうのだ。

「てい。」

「いたっ!?!」

俯くラモンのきれいな額に向かって、セロは力の限りデコピンを繰り返す。思いがけない衝撃と痛みを額を抑えて目を瞬かせるラモンに、セロは口元を釣り上げて左手を差し出した。

「セロさん?」

「お兄さんちよつと戦い続けて疲れちゃったな!。ラモン、手を引っ張ってくれないか?」

「え。」

「あー、セロさぼる気がよー。」

「少しはさぼらせる。ラモン、よろしく。」

「は、はい……」

ラモンはセロの手をとり、先に歩き始めていたヴァンの横に並ぶ。わざとゆっくり歩くセロの右手をヴァンが握り、ラモンと一緒に引っ張っていく姿を、大人組みがそれぞれの表情で見つめていた。

#### 第四話 ルース魔石鉱？

ルース魔石鉱の奥には、魔石の光による青色の空間が広がっていた。今までの空間は在り来たりな坑道だったが、魔石の採掘場は入り口に少し石畳が敷いてあるだけで、後は壁も天井も床も青い光を放つ鉱石で染められていた。

「これを見たかったんですよ。」

青の壁を見つめながら歩いていたラモンは、足元に埋まっている魔石を見るためにしゃがみこむ。ポケットから青く光る奇妙な物体を取り出し、魔石の光と見比べている。

「なんだ？」

「破魔石です 人造ですけどね。」

「はませき？」

覗き込んだヴァンの声に振り返らず、ラモンの目は魔石鉱の壁を観察し続ける。背を向けたままのラモンは、自身を鋭く見つめるバルフレアの視線に、気付かない。

「普通の魔石とは逆に、魔力を吸収するんです。人工的に合成する

計画が進んでいて、これは　その試作品。ドラクロア研究所の技術によるものです。」

ピクリと眉を動かしたバルフレアの変化に気付いたのは、相棒であるフランと隣に居たセロだけ。窺うようなセロの視線も気にしないほどに、バルフレアはラモンの小さな背中を睨みつけていた。

「やはり、原料はこの魔石か　」

ラモンの手にある物体　人造破魔石の光の色は、魔石鉱の色と全く同じだった。

セロは無意識に首にかかるペンダントを握りしめる。

最近品薄だったルース魔石鉱産の魔石。品薄の理由は帝国のジャツジとオンドール侯の会話の通り、良質の魔石が全て帝国へ密輸されているからであろう。

そして、その魔石が人造破魔石の原料となり　それを指示しているのは、アルケイディア帝国第十一代皇帝の三男、帝位継承権第一位のヴェイン・ソリドールという事実。

思わず、ため息をつくセロ。戦後二年を経過した今でも、きな臭い事が溢れているなんて、どうやらラバナスタに平穩はまだまだ訪れないらしい。

「用事は済んだらしいな。」

セロがため息をついてすぐ、バルフレアは壁を観察したままのラモンに向かってゆっくりと歩み寄り始めた。

「ありがとうございます。のちほどお礼を。」

「いや、今にしてくれ。お前の国までついていくつもりはないんでね。」

バルフレアの言葉に驚いたように振り向くラモン。視線の先には、バルフレアが無表情でにらみつける姿があった。

「破魔石なんてカビくさい伝説、誰から聞いた。なぜドラクロアの試作品を持つてる。あの秘密機関とどうやって接触した。」

一歩バルフレアが前に進めば、ラモンが一步後ずさる。それを繰り返せば元々壁の近くにいたラモンの背に、冷たい石の感触があった。横に逃げようと体を動かした先を、バルフレアの長い腕が遮った。

「お前、何者だ？」

問い詰める低い声に、ラモンは視線をバルフレアに向ける。

「おい、バルフレア。」

「待ってたぜ、バルフレア！」

異様な雰囲気、ヴァンがバルフレアとラモンに駆け寄ったとき、坑道の奥から歓喜の色を湛えた濁声が響いてきた。一行が声の方に顔を向けると、奥から数人のバングの男が武器を手に出してくる姿があった。

「あいつか。」

「そう。」

静かなセロの声に反応したのはフラン。彼の肩に手を置き、落ち

着けと言いたげに力を込める。セロはフランに視線を向け、小さく頷いた。

「ナルビナではうまく逃げられたからな、会いたかったぜえ？さっきのジャッジといい、そのガキといい　金になりそうな話じゃねえか。オレも一枚噛ませてくれよ。」

バングの男　　バツガモナンは顔を笑みに歪めながらも、その目はきつくバルフレアの姿を捉え続けている。

セロがヴァンから聞いた話では、ナルビナ城塞の地下にまでバルフレア達を追いかけてきたバツガモナンを、機転とジャツジマスターの登場によって撒いたというもの。執拗に追いかける根性は見事だが、あっさり撒かれるあたり、あまり商売に向いているとはセロは思えない。

「頭使って金儲けってツラか。お前は腐った肉でも噛んでろよ。」

「バルフレアアッ！」

同じことを考えたのか、呆れた顔で嫌味を言うバルフレアに、笑みを浮かべていたバツガモナンの表情が凶悪なものへと変わる。手元のスイッチを押し、速度を速めたチェーンソー型の武器からモーターの回る不気味な音がけたたましく鳴り響く。

「てめえの賞金の半分は、そのガキで穴埋めしてやらあ！」

「この……」

「攫った子はどこにいる？」

バツガモナンを睨みつけ、くっつかかろうとしたヴァンの肩をつかみ、ぐいと後ろに引く。バランスが崩れたたらを踏むヴァンを支



えながら、抑揚のない静かな声でセロは問いかけた。

「アア？ 餌はもう必要ないからな。途中で放してやったら、泣きながら飛んで逃げてったぜ！」

嘲笑いながら武器を構えるバツガモナン。 次の瞬間、その顔に目掛けてラモンが手元の物体 人造破魔石を投げつけた。コントロールが良いのか、顔の中心にぶつけられたそれは原料が魔石とというのもあって、バツガモナンに相応のダメージを与えたようだ。

「おい！」

「ナイス、ラモン！」

「んなこと言っている場合か。」

落ちた人造破魔石を拾い、ヴァンたちを振り切って走り出したラモンを、セロが心底楽しそうな笑みで讚える。バルフレアはセロの後頭部をはたくと、顔の痛みに呻くバツガモナンを押し倒してラモンを追いかけた。ヴァンたちも後を続くが、どさくさに紛れてセロに踏みつけられたバツガモナンが後ろで吼えている。

「逃がすかア！」

体の大きい種族であるバンガは、ヒュム族より遥かに力はあるが素早さという能力は低い。恰幅のよいシーク族ほどまではいかないが、重量のある武器を持っていることもあり、ヴァンたちに追いつくことは至難だろう。

「おい待てって！」

ヴァンらはもはやバツガモナンたちを気にしておらず、前を走るラ

モンを追いかけ続ける。しかし、華奢で小さな体躯のラモンは、軽やかに坑道を駆け抜けていく。

「いい走りっぷりだ。行きもスケルトンたちから走って逃げられたかもしれないな。」

「お前が過保護にするからだ。」

「子供は甘やかすもんだぞ？とくにラモンみたいな真面目な奴はな。」

感心しているセロに呟くバルフレア。もとの明るい表情に戻ったセロを後ろから見て、バツシュは小さく息を吐いた。

先ほどバツガモナンと対峙していた彼は、いつもの穏やかな空気ではなく、切り裂くような冷たい雰囲気を纏っていた。攫われた少女が心配だったというのもあるだろうが、直前までのおどけた調子と間逆の彼の姿がバツシュにはどうも気にかかった。

「誰にでも、滅多に表に出ない一面はあるわ。」

考え込むバツシュに、隣を走るフランが視線を向けずに言う。

「彼は意外性が大きかっただけよ。」

「……そうだな。」

「心配なら、しっかり『お母さん』を見ていればいいの。」

「『お父さん』としてか。」

「ええ。」

微笑むフランにつられて、バツシュも笑みを浮かべる。ヴァンもセロも、彼の心を救った恩人だ。彼らが苦しむことがあるのなら、この身でよければ喜んで盾となろう。

前を走るバルフレアに絡むセロを見て、バツシュは一人小さく決

意した。

\* \* \*

「……追ってくる気配はないわ。振り切ったようね。」  
「バンガの足に追いつかれるようじゃ、空賊廃業さ。」

しばらく走ったあと、バツガモナンたちを振り切ったヴァンたちは、走るペースを少し緩めていた。魔石鉱の入口が近いこともあり、帝国兵がいることが予想されるためだ。子供を追いかける複数人の大人の姿は、どちらが犯罪かとても分かりやすい。

「セロ、大丈夫か？」  
「だ……いじょうぶ……」  
「には到底見えないぞ。」

もうひとつの理由は、セロの体力が枯渴したからだだった。行きの連戦と魔石鉱の奥からのマラソンで、元々体力の少ないセロは荒い息を吐いていた。

「肩を貸して、どうなるレベルじゃないな。」  
「ああ。ヴァン、戦闘を頼んでいいか？」  
「え？うん、まかせろ！」

バルフレアが剣を奪い、バツシュがしゃがんでフランがその背にセロを乗せる。合って一週間とは思えないほど息の合った動作に、セロはされるがままバツシュに背負われていた。

「セロはゆっくりしてるよ。俺だって強くなっただからな！」  
「おー、期待してる。」

胸を叩いてヴァンがセロに笑顔を向けると、セロはへらりとした笑みを浮かべる。気合いの入った様子で近くのスティールに切りかかる姿を見て、安心したようにセロは瞼を閉じた。

## 第五話 オンドール侯爵邸潜入？

「よく寝ているわね」

「図太い神経の持ち主だっことはわかっていたが、いい加減起きろ」

「……いたい」

頭に軽くない衝撃を感じて、セロは目を開けた。彼の視界に入ったものは、近くにある金色と拳を握ったバルフレアの姿。恐らく彼の頭を殴ったのはバルフレアであろう、後ほど仕返しをすることを心に決め、セロはぼんやりとした頭で周りを見回した。そして、自分が手を置いているのはバツシユの肩であり、未だ彼に背負われたままだということに気が付いた。

「おはよう。そしてごめんなさい」

「気にすることはない。……立てるか？」

「ああ」

バツシユは腰を屈め、セロを地面に下ろした。バツシユの背から手を離れた途端、よろめいたセロの肩をバルフレアが咄嗟に支える。未だ体力が戻っていない彼の様子に、バルフレアは顔を曇らせた。

「アンタがそこまで体力がないとは思わなかった。無理をさせて悪い」

「いや、同行を願い出たのは私だし、言わなかったのも私だ。こちらこそすまなかった……今はどうなっている？ヴァンはどうした？」

頭を横に振り、今度はしっかりと地面に立つセロ。近くにヴァン

の姿がない事に気付き、何故か微妙な表情を浮かべているバルフレアたちに疑問を覚えながらも尋ねる。

じっと見つめてくるセロの視線から一度目を逸らして、バルフレアは今までの経緯を話し始めた。

## 第五話 オンドール侯爵邸潜入？

ヴァンたちがルース魔石鉱の入口に辿りついた時には、ラモンはすでに外に出ており、その小さな背の向こうには魔石鉱へ入るときにすれ違った、ジャツジマスターの姿が見えた。ヴァンたちは柱の陰に身を隠し、そっと日の当たる入口をのぞき見る。

「また、供の者もつけずに出歩かれたようですな。ラーサー様」

歩いてくるラモン いや、ラーサーに向き直り、咎めるような口調でジャツジマスターの男は声をかけた。ラーサーは何も答えずに、ジャツジマスターの横に居る金髪の少女 パンネロに視線を移す。

「ひとりで魔石鉱から出てまいりまして よからぬ連中の仲間で

はないかと」

「私は、さらわれてきた」

「控える」

ジャツジマスターの言葉に顔を上げたパンネロが不可抗力なことだったと訴えようとしたが、掛けられた冷たい声音に肩を震わせる。

「ひとりで出てくるのが疑わしいのなら 私も同罪でしょうか？」

ラーサーは自分の体をジャツジマスターとパンネロの間に移動させ、穏やかな口調で厳めしい鎧兜を見上げた。ジャツジマスターが何も返せずにいると、ラーサーは今度はオンドール侯爵に向きなおる。

「ハルム卿、屋敷の客がひとり増えてもかまわないでしょうか」

「ははあ……」

「ジャツジ・ギース。あなたの忠告に従い これからは供を連れてゆくことにしましょう」

オンドール侯爵は少し思案した後、ラーサーの意見を受け入れる。それに微笑みを浮かべ、ラーサーはパンネロの手をとって市街地の方へと歩き出した。

「困ったものですね」

気ままに行動するラーサーの後ろ姿を見つめて、ジャツジ・ギースは淡々と呟いた。

「よろしく、パンネロ」

「あつ、はい……」

パンネロの手を引きながら、ラーサーはにこやかに声を掛ける。何がどうなっているのか、何故自分の名前を目の前の少年が知っているのかと、混乱気味のパンネロは曖昧な返事しか返せなかった。一方、階段を上っていく二人の後ろ姿を見つめていたヴァンだったが、戸惑った表情を浮かべて壁の背に隠れてしまった。

「なんでパンネロが　何考えてんだよ、ラモン」

遠目ではあったが、パンネロはラモンに手を引かれて嫌がる様子もなかった。彼女が拒否をしなかったのは混乱していたからなのだが、それを鈍感なヴァンが思い至るはずもない。先ほどまで一緒にいた、知ったはずの少年と幼馴染の少女が一緒に居る姿は、とても自然だったことが何故か気に障る。

「ラモンじゃない。ラーサー・ファルナス・ソリドル。皇帝の四男坊　ヴェインの弟だ」

「あつ、　あいつ！」

「大丈夫。彼、女の子は大切にする」

「フランは男を見る目はあるぜ」

俯くヴァンを黙って見ていたバルフレアだが、さらなる事実をヴァンに突き付ける。それにヴァンは慌てるが、フランが腰に手を当てて否定した。バルフレアが軽い口調でヴァンを安心させるように言うと、少年は落ち着きを取り戻した。

「行き先はオンドールの屋敷だな。問題は、どう接触するかだ」

「侯爵は反帝国組織に金を流してる　そっちの線だな」

少し気の抜けた空気をバッシュが目的を言うことによって引き締



める。帝国兵の姿が完全になくなることを確認して、ヴァンたちは魔石鉱入口の階段を上っていった。

「セロ、起きないな」

階段を上る途中、バツシュに背負われたセロに視線を移し、ヴァンが小さな声で呟く。剣を武器として<sup>エモ</sup>いる割にはあまり筋肉のついてない細身の体は、背負っているのが元將軍のバツシュということもあり、ひどく頼りない印象を見る者に与える。

「よほど疲れていたのだろうか」

「疲れているだけだよな？　ちゃんと、起きるよな？」

「ヴァン？」

「起きて、笑ってくれるよな……？」

バツシュの相槌に力ない声で呟き続けるヴァンの表情は、どこか遠くを見ているかのように虚ろだ。『セロがもう起きないのはいか』という考えは、兄であるレックスに姿を重ねているのである。続けるようにセロの服を掴む手は、ヴァンにとってセロが少年を保つ重要な支えであることを示していた。

「当たり前だ。起きなきゃ俺が叩き起こすからな」

「バルフレア……」

「大丈夫だ、ヴァン。少し休めばすぐ目を覚ますだろう」

「……うん、そうだよな」

軽い口調のバルフレアたちに、ヴァンの気分も浮上する。恐らく、

家族の一人が保護されているとはいえ簡単に会えない場所に居ることと、何かとヴァンをフォローするセロがまるで死んだように眠っていることで不安定になっているのだろう。

バツシュは後ろを歩くヴァンを意識しながら、ゆっくりと再び階段を上りだした。

「オンドール侯は二年前、私が処刑されたと発表した人物だ。私の生存が明るみになれば、侯爵の立場は危うくなる」

「侯爵を金ズルにしてる反帝国組織にとっても、面白くない事態だろうな。『バツシュが生きてる』ってウワサを流せば、組織の奴が食いつくんじゃないか」

階段を上りきったあたりで、バツシュは立ち止り振り返る。同意を返すバルフレアも同じく立ち止り、どのように噂を流すか思案している。ヴァンが元気よく提案した。

「だったら、オレが街じゅうで言いふらしてくるよ。こんな風にさ」

ヴァンは一つ咳をすると、自らを指差し堂々と声を出した。

「オレがダルマスカの、バツシュ・フォン・ローゼンバーグ將軍だ」

周囲に居る住民が何事かと疑わしげにヴァンを見る。その視線に気づいているのかいないのか、ヴァンは自信満々にバルフレアたちに向き直った。

「どつだ？」

「……まあ、目立つのはたしかだな」

実に脱力した声の返事だったが、ヴァンは気づかない様子で嬉しそうに拳を握る。

「よしヴァン、お嬢ちゃんを助けるためにもやれるだけやってこい。できるだけ人の多い場所だな。オンドール侯爵と接触できるかどうかはお前次第だ。オレたちはここにいる、何かあったら戻ってこい」  
「了解！セロのこと頼むな！」

バルフレアが街を指差し畳みかけるようなスピードで言うと、ヴァンは頷いて手を振りながら駆け出していった。その様子後ろ姿を眺めていたバルフレアとバツシュに、フランがぼつりと呟く。

「……恥ずかしかったのね？」

「ヴァンはすごいな……」

「できるかなこと……」

羞恥心に耐えられなかった大人たちは、体よく少年に役目を押し付けたのだった。

\* \* \*

話を聞き終わったセロは、じつとりとした視線をバルフレアたちに向けた。

「そんな目で見るな。拙い作戦なのはわかってるさ」

「しかし、他に方法も思い浮かばなかったのだ」

苦い表情で口ぐちに言う二人を、眠りこけていたセロが非難する権利はない。寝起きのせいではない頭の痛みに米神を揉み解していると、フランが顔をあげて通りを見つめた。

「時間的に、そろそろじゃないかしら」

「ああ、どうやら……引っかかったようだしな」

彼女の視線の先には様々な装束の男たちに囲まれ、連れて行かれるヴァンの姿があった。

「追いかけるぞ」

バルフレアの小さな声に全員頷き、距離を取りながら後をつける。辿り着いた先はどの街にもある酒場だった。

「酒場ねえ……王道だな」

「酒場か……ビュエルバ魂がほしいな」

「後にしろ」

\* \* \*

「あら、いい男」

「おいおい、俺らもいい男だろうがよ？」

「殴られて顔が腫れてなければねえ」

「がははは、それ素顔じゃねえか！」

酒場の中に入ると、カウンターの中に居た店員の女が、セロたちを見て目を丸くした。その理由をセロは後ろのメンバーの顔の良さと判断する。バルフレア然りバツシユ然り……なかなかお目にかかれない美形な上、フランも種族がビュエラともあり珍しい。

酔っ払いをあしらう店員に困ったような笑みを見せ、セロはカウンターに近づいた。

「連れが悪戯やらかして酒場に連れて行かれたって聞いたんだが……銀髪の少年を見なかったか？」

「なんだアンタ、あの坊やの保護者？」

浮かべていた笑みを呆れた表情に切り替え、店員は保護者を見据える。

「しっかり見といて貰わなきゃ困るよ。あいつ等いつもピリピリしてるんだから。」

「すまないな。どこに居るかわかるか？」

「奥の部屋に居るよ。　　ねえ、通してあげなよ」

店員の視線の先には、扉の前に立ちふさがっているバンガの男がいた。男はセロたちを一瞥すると、軽く頷き扉の前から体を動かした。セロたちは観察するような男の視線を感じながら、少し薄暗い扉の奥へと入っていった。

「ケツ、やつぱり別人か。タチの悪いイタズラしやがって！」

短い廊下を挟んだ先、酒場の物置となっている部屋とは異なり、重厚な扉を眺めた場所から苛立った声が聞こえる。

「ただのイタズラならいいが、そこらのガキがローゼンバーグ将軍を名乗るとは思えん」

先ほどの声とはまた違う声音。内容からしてヴァンがいるのはこの部屋で正しいようだった。

「締め上げて背後関係を吐かせる。最近、帝国の犬がかぎまわってるからな」

「あんたらの組織と侯爵の関係をかい？」

不穏な台詞が聞こえた瞬間、バルフレアが扉を開けて部屋に入った。その素早さは同じく扉を開けようとしたセロが、ノブを掴もうとした手のまま呆気にとられたほど。彼に続いて扉をくぐったフランが一瞬微笑みを浮かべているのを見て、セロは弟分がかなり青年に気に入られていることに気づき、口端を釣り上げた。

「街のガイドを隠れミノに諜報活動か。酒場の奥がアジトとは、また古典的だねえ」

「なんだてめえら!？」

「待て!!!」

照明用の魔石で照らされた部屋の中を見回し、バルフレアは中に居る人間の顔の頭に入れる。軽い口調の言葉に苛立ったのか、近くにいたバングの男がバルフレアに掴みかかるうとする。バルフレアも構えようとしたとき、部屋の中央、椅子に座っている男が制止

した。

「あなたは」

男はセロたちを凝視していた。正しくは、部屋に入ってきたバツシュの姿を見て、組んでいた腕を外し椅子から立ち上がりかける。

「本当に生きていたのか　！」

ゆっくりと近づいてくるバツシュを見て、驚愕に固まっていた男は一つ息を吐いて落ち着きを取り戻した。浮いた腰を再び椅子に下ろし、楽しそうな笑みを浮かべ再び腕を組む。

「いかにも裏がありそうだったが、まさか本物のご登場とはな。このことを侯爵が知ったら」

「さて、なんと言うかな。直接会って聞いてみたい」

バツシュと男の視線がぶつかり、沈黙が部屋を満たす。先に視線を逸らしたのは、座った男のほうだった。

「　どうすんですかい、旦那」

「致し方あるまいな」

男が視線を左に移し、声を掛ける。答えたのは奥に座っていた身なりの良い、レベ族の男。ゆっくりと立ち上がり、落ち着いた表情でバツシュを見つめた。

「侯爵閣下がお会いになる。のちほど屋敷に参られよ」

レベの男はそれだけ言うと、部屋の外へと出て行った。

「ん？そこのお前……セロか？」

その後ろ姿をセロが見送っていると、後ろから声を掛けられた。振り返った先に居たのは椅子に座っている男のみ。首を傾げてセロが男に近づくと、見知った顔だったことに気付く。

「あ、もしかしてハバーロか？」

「やはり、セロか！何故お前がここに」

「いや、まあ」

先ほどまでの不敵な表情がどこに行ったのか、立ち上がって目を丸くした男　ハバーロにセロは詰め寄られて一歩後ろに下がった。

「知り合いか？」

「モブ討伐の依頼主だ。会った場所はビュエルバじゃないけどな」

セロの意外な交友の広さに、バルフレアが眉をひそめる。それを見てセロは苦い笑みを浮かべた。別に反帝国組織の一員と知って知り合ったわけではないことを暗に告げると、納得したのかバルフレアは少し表情を緩めた。

それに気付いているハバーロだったが、親しげな笑みを浮かべてセロの肩を軽く叩く。セロも同じように肩をたたいた。

「驚いた。お前がここに居るのも、ローゼンバーク將軍に同行しているのな」

「まあ、事情があるんだよ」

「詳しくは聞かんよ。前に言っていた弟たちは元気か？」

「もちろん。ビュエルバ中を走り回っていたらどう？」



楽しげなセロの笑みにハバーロは一瞬思索するが、ゆっくりと傍らにいた少年　ヴァンに視線を移し何か言いたげな表情を浮かべた。

「……そいつが弟か」

「ああ。」

「まあ、なんというか、少し想像と違うな」

「そうか？」

言葉を選んでいる様子のハバーロに、不思議そうな顔をするセロ。その光景を見て。ハバーロの気持ちがよくわかったバルフレアは、ひとつため息をついてセロに声を掛けた。

「おい、いくぞセロ」

「　悪い、また会おう」

「お前が何に巻き込まれているのかわからんが、気をつけてな」

「それはこちらの台詞だ」

「く、違くない」

死んだはずの將軍と行動を共にしているセロと、反帝国組織の重要な位置にいるハバーロ。どちらともに物騒な事件に違いはなかった。

お互いに苦笑を浮かべた後、セロは自分を呼ぶヴァンの元へと歩き出した。

## 幕間：語り手 パンネロの場合

語り手 パンネロの場合

ええと、セロさんとヴァンと私は、血は繋がっていないんです。ご両親を病気で亡くしたヴァンとレックスさん　ヴァンのお兄さんを私の家族が気にかけていたのが最初です。

それから、戦争になって。私の家族も、レックスさんもいなくなつて……しばらくしたときに、ヴァンがセロさんを連れてきたんです。

最初は、何でこの人がここに居るんだろうつて思いました。

まるで外に出たことがない子供みたいに、生活をする上で当たり前のことをセロさんは知りませんでした。男の人とは思えないくらい柔らかく笑う人でしたから、どこかの国の貴族様なんじゃないかって勝手に思っていました。

ヴァンがセロさんを連れてきて、いつの間にか私も一緒に、まるで家族みたいに生活するようになって……戸惑ってはかりだったセロさんも、半年くらい経つと普通に生活できるようになっていました。

その頃からです。セロさんは、ヴァンに剣を習うようになりました。

最初はミゲロさん　あ、私たちがお世話になっている人です  
その人と私は止めました。だいがセロさんもラバナスタに慣れた  
とはいつても、最初の印象が強く残っていたんです。あんな柔らか  
い笑顔の人が、剣なんて使えるはずがないって思ってた。

でも、セロさんは剣を習うのをやめませんでした。それどころか、  
こっそりモブ狩りすら始めていたんです。どうして危ない事をする  
のか、セロさんを問い詰めたこともあります。でも、困ったように  
笑うだけで、何も答えてくれませんでした。

私は、セロさんに、大切な家族に危ない目に遭ってほしくないん  
です。

ヴァンも、無茶ばかりするし……

はい、ヴァンもセロさんも、私の大切な人です。ラーサー様

## 第六話 オンドール侯爵邸潜入？

「なあ、何ですぐに行かないんだ？」

酒場を後にしたセロたちだったが、屋敷に向かわずにビュエルバの武器屋に寄っていた。店に入ってからすでに数十分は経っており、ダガーや長剣が並ぶ棚を吟味するバルフレアとバツシユの後ろ姿を眺めながら、手持無沙汰になったヴァンは隣に立つセロに問いかける。

「会えないからだ。お偉いさんつてのは準備に時間がかかるものだからな」

「ふーん」

「分かってないだろ」

それほど興味がなかったのかヴァンは質問したにも関わらず、生返事を返しながら近くの棚に並んだロッドを見ている。その姿を見てセロは軽く肩を落としながら呟き、ヴァンを睨みつけた。

## 第六話 オンドール侯爵邸潜入？

「これが丁度良い、か」

「ああ、これならばそこまで戸惑いは少ないだろう」

購入する品を決め、バルフレアは見本の武器の隣の壁にぶら下げられていた、値段が書かれた札を持ってカウンターへと近づく。会計をバルフレアに任せたバツシュは、振り返った先の光景に呆れた表情を浮かべた。

「……なにをしているんだ？」

「しっけ」

バツシュの視線の先には、無表情でヴァンの頬をつねるセロと、つねる手を外そうともがいているヴァンの姿。会計を済ませ戻ってきたバルフレアは二人を見て一瞬歩みを止めたが、やめさせようとならないバツシュに理由を察し、流すことにした。

「それを買ったのか？」

「まあな。セロ、ちよつとお前の剣を貸せ」

「ああ、かまわないけど……ほら」

バルフレアの手握られた武器、『棒』に視線を向けるセロ。バルフレアは軽く頷き、棒を手に持ったままセロへと手を伸ばす。セロは腰のベルトから長剣を外し、バルフレアの手に乗せた。すると、受け取った剣をバルフレアは何故かヴァンに渡す。

「え？」

「ヴァンはこれからこの剣を使い。セロはこの棒だ」

「な、なんでそうなるんだ！」

ヴァンはぼかんとした表情で受け取った剣を見つめる。バルフレアが渡そうとする棒を押しやって拒否しながら、セロは慌ててバルフレアにくっついてかかった。

「体力ないのに剣を使っている方が問題なんだよ」

「セロにはもつと軽い武器の方がいい。最初は戸惑うだろうが、使い方なら私が教えることもできる」

しかし力のないセロが銃使いとはいえ荒事に慣れた素手でもごろつき程度の武器持ちの相手を倒せる。バルフレアに敵う訳もなく、棒を押し付けられて嫌そうな表情を浮かべていた。その様子を面白そうに見ているバルフレアと、真摯に説得しようとするバッシュにセロは不貞腐れた顔を向けた。

「教えると言ってもな、そう簡単に武器は変えられないぞ」

「今のうちに変えておいた方がいい。この手を見れば、君がどれほど修練を重ねたかは分かる。半年でよくぞあそこまでの腕を得たものだ」

バッシュはセロの右手を取り、手のひらを上に向ける。男にしては白く滑らかな甲の皮膚とは違い、何度も肉刺が潰れたのだろう。そこは、ひどく皮膚がひび割れ、硬化化していた。セロが回復呪文を使えることを考えると、通常であればよりひどい状態であったと予想できる。

「君には剣の才能があるのかもしれない。だが、このままでは体力がつく前に君は命を失うぞ」

「そんなことは」

「分かっているのだろう？ 君は致命的に体力がない、前衛には向

かないということを」

バツシュの真剣な眼差しを避けるように、セロは視線を床に向けた。確かに、セロがモブ狩りなどで足を運ぶ地域には、彼の腕よりも強いモンスターも多くいる。それほど強くない魔物だけのルース魔石鉱でも、彼はすぐに息を切らせてしまった。

弟分のヴァンよりも貴族であるレーザーよりも、遥かに体力のないセロがこれからも前衛を続けるには、不安要素が強すぎた。

「ヴァンもそれなりの腕になっているしな。魔力も高いんだから、あんたは後ろで攻撃魔法でも使っていた方がいい」

「使えないんだ」

「なに？」

俯いてしまったセロを励ますように、バルフレアは声の調子を軽いものに変えて彼の肩を叩く。視線をバルフレアに向けたセロだったが、困った表情でポツリと呟いた。

「私は、攻撃魔法が使えないんだ。正確には、回復魔法以外全部使えないというか」

気まずい表情で目を泳がせるセロを、妙なものを見る目を向ける一同。目の錯覚か、彼の額に光るものを見たバルフレアは、米神を揉み解すとセロに向かって手を差し出した。

「ちよつとライセンスボード見せる」

セロはポシエットから折りたたまれた薄い板を取り出し、バルフレアに渡した。これはライセンスボードといって持ち主の習得した

技能を記したものだ。個人の何かしらの情報が登録できるらしく、習得が完了した技能は自動的に色がつくという代物だった。

バルフレアはセロのライセンスボードを広げ、数秒じつくりと見た後にヴァンたちにも見えるように裏返した。

装備品のエリアはともかく、技能エリアの左上の魔法欄は、白魔法以外 いや、『回復魔法』以外の魔法名が暗く潰れたままだった。

白魔法のレベル1には『初級回復魔法 ケアル』と『視力回復魔法 プラナ』があるが、これは魔法を学び始めて一番初めに習得できる魔法になる。もちろん一番最初なので、魔法のアイテムを持つていれば、十歳を数えるころには誰でも習得することができる。ところがセロの場合、『初級回復魔法 ケアル』は習得できているが『視力回復魔法 プラナ』は文字が暗くなつたままになっていた。

「これは、見事なくらいに魔法エリアが空欄だな」

「その人の性質によっては、習得できない技能は確かにあるけれど……それは上位の技能であつて、下位の技能ができないというのは初めて聞いたわ」

バツシユの言葉にフランは頷き、ライセンスボードの習得済みの魔法を指でなぞる。他に習得できているのは、複数回復魔法 ケアルのみで、セロの使える魔法は現在二つだけだった。

「剣を選んだのは、これが原因か」

「武器の中では一番応用力があつて攻撃力が高いからな。安いし」  
「武器<sup>エモノ</sup>を値段で決めるな」

ライセンスボードを折りたたむバルフレアの隣で、セロが手を差



し出しながら頷く。たたまれたライセンスボードがセロの頭に直撃したのは言うまでもない。

「とにかく。セロの武器は今後は軽いものを選ぶ。つまり棒だ」

「私に決定権は？というか、ナイフも軽いぞ」

「ない。ナイフだと今と変わらないだろ、アホか」

「セロが使っていた剣……、大事につかうから！」

バルフレアは頭をさすっているセロが落とした棒を拾い、反論は認めないとばかりに棒を彼に突き付ける。いまだしぶっていたセロだが、剣を抱えたヴァンの妙にきらきらとした視線を受けて、諦めたように肩を落として棒を受け取った。

店の外に出ていくバルフレアとヴァンを見送ったあと、フランは落ち込んだ様子のセロの背中にそっと手を添える。セロが顔を上げると、わずかに口角を上げたフランの顔が目に入った。

「『息子たち』は心配なのよ、『お母さん』」

「……『娘』は心配してくれないのか？」

「もちろん、心配よ。『お父さん』もね」

「後で使い方を教えよう。なに、君ならすぐにできるようになるさ  
『お母さん』」

楽しそうな表情に定着させようという二人の本気が見え、セロは苦笑いを浮かべるしかなかった。

\* \* \*

武器屋を出たセロたちは、他にもアイテムや防具を揃え装備を整えたあとオンドール候の屋敷に向かった。荘厳な門の前に立つ兵がセロたちに気付き、一礼する。

「話は伺っております。オンドール閣下のもとへご案内いたしますようか？」

「ああ。頼む」

「承知いたしました。閣下は日没まで公務がございますので、それまで邸内でお待ちいただきます。私についてきてください」

バツシュが頷くのを確認して、兵士は門の内側に立つ同僚に目配せする。ゆつくりと重そうな響きを立てながら門が開き、声を掛けた兵士の先導にセロたちはついていった。

「日没って、まだ会えないのかよ」

「な、時間がかかるって言っただろう」

通された一室で兵士が礼をして出て行くと、柔らかいソファアの感触に居心地悪げに座りながら、ヴァンは隣に座ったセロに拗ねたように言う。

「こうしている間にもパンネロが」

「四男坊自ら保護しているんだ。俺たちよりも丁寧に持て成されているはずさ」

細かい刺繍がされたソファアに座り、兵士が用意していった紅茶に口をつけつつバルフレアは言う。

「大人しく待っているんだな。暇ならセロに話をせがめ」

「おい」

「そうだ！　そういえば聞きそびれてたけど、今回のモブ退治はどうだったんだ？　随分、時間がかかっていたみたいだけど」

落ち着かない様子のヴァンに呆れたのか、バルフレアがセロを指差し子供ヴァンの相手押し付ける。ティーカップに手を掛けようとしていたセロに顔を向け、ヴァンは覗き込むようにして話を催促した。

わくわくという擬音がよく似合いそうなヴァンの様子に、セロは苦笑を浮かべるとティーカップへ伸ばしていた手をひっこめた。

「まったく……ああ、私はサポートで討伐に着いていったのだが、そのモブが砂嵐が激しいときにしか出てこない奴だな。現場にたどり着いたはいいが、これでもかと天気がよくて……見つけた後は早かったんだがなあ」

「へー。サポートってことは今回は素材集めだったんだ？」

「素材集めとは？」

「仕事用のな。私のモブ討伐の大半はこれが目的だ」

セロはポーチから石を取り出すと、見やすいように指でつまんだ。魔物を倒した後、はぎ取った素材や見つかったアイテムをおたからと呼ぶ。その中には魔力を帯びた石も含まれ、それぞれの属性のミストを発している。割合小さな魔力しかないものを「石」、それよりも多く魔力を含むものを「魔石」と呼ぶ。

「魔石、いや魔晶石か。売るんじゃないのか？」

「加工するんだ。私の本業は装飾職人でね」

セロが持っているのは、砂漠で採れやすい風の石や風の魔石では

なく、それより上位の風の魔晶石だった。これは石に魔力が帯びたのではなく、魔力　ミストそのものが結晶化したものだ。

どんなに小さなかけらの魔晶石でも最低価格160ギルでどの店も買い取ってくれるが、強力な魔物がミストに惹かれて集まり、すぐに飲み込んでしまうこともあって貴重かつ見つけにくい。そして倒した後にその魔物を解体しなければならぬので、専用の道具が必要になる。

彼の手の中にあるのは大きな飴玉ほどの大きさ。ここまでくると、富豪位の資産家でないとお目にかかれないほどの代物になる。

セロは魔晶石をポーチに仕舞い、今度は別のポケットから装飾品を取り出した。テーブルに置かれたのは赤い火の魔石が埋め込まれた首飾りと、緑の風の魔石が埋め込まれた耳飾りだった。二つの装飾品は共に金属製ではなく、木材に細かく装飾が施された台に魔石が埋め込まれている。首飾りは細いチェーンではなく、細かく織られた紐で台座とつなげられている。

「これは……見事だな」

「はは、ありがとう」

魔石以外に鉱物を一切使用しないそれは、物珍しさもあるが金属のそれよりも柔らかい印象を受ける。その出来栄えにバツシュが感嘆の声をあげると、セロは照れたように頬を掻いた。

その様子をバルフレアはじっと見つめていたが、おもむろに手に取った耳飾りを窓から入ってくる光にかざし、埋め込まれた魔石の部分を覗き込んで息を呑んだ。

「　　おいおい。セロ、あんた『オリバー・シモレット』かよ」

「オリバー、って誰だよ」

「ここ半年で急激に知名度が上がってる職人の名前だ。既存の効果にはない装飾品を作れるってことで、あちこちで商人が買いあさった結果、今では相当高値が付いている」  
「うそっ！」

楽しそうに耳飾りを眺めるバルフレアだったが、作った本人<sup>セロ</sup>の驚きの声に視線を耳飾りから彼に移した。

「なんであんたが一番驚いてんだ」

「元値が低いからだ。後できっちりトマジと話す必要があるな……」

自分の作品に高値が付いていることが本気で初耳だったようだった。恐らく知っていて黙っていただろう仲介役<sup>トマジ</sup>に、セロはとりあえず一発殴ることを心に決めた。

「でもよくわかったな、木彫りとはいえ特徴的な造形をしているわけでもないが」

「デザインはな。ただ、全ての作品で光を当てると、このマークが浮かぶようになってるんだ、分かる奴にはわかるさ」

バルフレアが指差した部分を、ヴァンが覗き込む。

「あ、なんか削ってある」

「これは花か？」

「ああ、『ウメ』という」

透き通った魔石の奥に丸い小さい円が一つと、それを囲むように配置された少し大きい円が五つ。確かに花に見えなくもないとヴァ

ンは納得した表情を浮かべる。

「ウメねえ……花にはある程度詳しいつもりだったが」

「クツ、なんか納得できるなあ」

「なんで？ バルフレア男だろ」

きよとんとした表情のヴァンを複雑な表情で見つめる三人。小さい頃に両親をなくし、周りの協力を得ながらも兄と二人で生き延び、終戦後の二年間スラム暮らしをしたとは思えないほど、ヴァンはその手の話に疎い。

純粹なのはいい、だがここまでくると世間知らずというよりも、男としてどうなんだとバルフレアは肩をすくめる。

「ヴァンにはまだ五年は早いかな」

「なんだよそれ」

セロの生暖かい視線と、無言で肩を叩くバツシュに、なぜか怯んだヴァンだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9715u/>

---

白の青年

2011年12月11日00時51分発行